

なぜ人はエッセイを書きたいと思うのか？ 友清 哲

（フリーライター）

自治体や企業が主催するエッセイ賞が次々と立ち上がり、巷のエッセイ講座も盛況だという。なぜ今、エッセイに注目が集まり書きたいと思う人が増えているのか？ エッセイ講座で講師も務める、エッセイストの山本ふみ子氏などに話を聞いた。

エッセイの起源は、一六世紀に刊行されたミシェル・ド・モンテニユの『随想録』にある。それまで主観的な考察をあれこれ繰り広げるスタイルの文芸は存在せず、『試みる』を意味する仏語「エセイユ」がこのジャンルの語源である。この「主観的な考察」という部分が、思考実験的なものと解釈されたわけだ。一方、日本における隨筆は、『枕草子』に端を発するとされる。隨筆の定義をひもとけば、「筆者の知識や体験を筆の赴くままに綴る散文」となり、ならばエッセイ＝隨筆とすることに何ら違和感はないのだが、両者は一般的に似て非なるものとして扱われている。

その理由を大まかにまとめると、エッセイが

心の赴くままに書き綴るものであるのに對し、隨筆は体験や出来事に主軸を置くもの、なのだから。つまり、ここまで筆者の能書きは、隨筆ではなくエッセイに相当することになる。

各地で盛況を呈する エッセイコンテスト

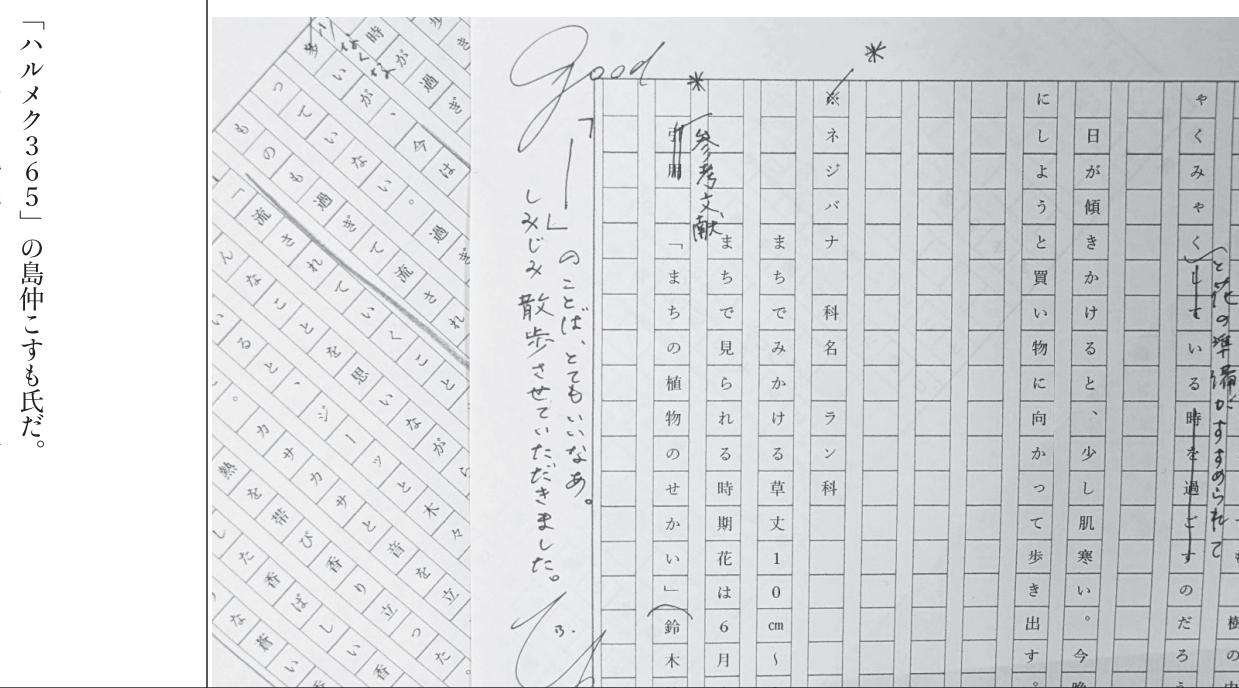
近年に限ったことではないのだろうが、最近は更に各地の自治体や企業が主催するエッセイコンテストが散見される。これはそれだけ、エッセイを書くという行為にニーズがあることを示している。

たとえば宮崎県の美郷町では、昨年から「美

郷文芸エッセイ賞」を立ち上げ、「土の香りのする郷土色豊かな文芸」を募って受賞作の書籍化に取り組んでいる。三井住友信託銀行は、讀えたい「人モノコト」をテーマとする「わたし大賞」をやはり昨年立ち上げ、大賞三名に三〇万円相当のギフトカードを贈るという。

また、千葉県市原市では、『更級日記』の著者である菅原孝標女が、京へ戻るために上総国府（現在の市原市）を出発してからちょうど千年にあたる西暦二〇二〇年を「更級日記千年紀」と打ち出し、「更級日記千年紀文学賞」を立ち上げた。すでに第三回までを終えており、実は筆者は初回から一次選考委員を仰せつかっている。この「更級日記千年紀文学賞」、さほど大々的に募集告知を打つていているようには見えないのが、毎回本当に多くの作品が寄せられる。ここにはかくも思いの丈を文章で表現したい人々があふれているのか、ということだ。

もちろん、在野のアマチュアの手によるものだから、そのレベルはまちまち。思わずハッときさせられる玄人はだしの名文もあれば、日本語すらおぼつかないものもある。また、応募者に七〇代以降のシニアが多いのは賞の特性によるものだろうが、なかには稀に、一〇代や二〇代



「山本ふみこさんのエッセイ講座」による添削の一例。「うちは全肯定型の講座なので」と語る山本氏による、丁寧で優しいコメントが目を引く。
写真提供／ハルメク

から作品が寄せられることもある。世代を問わず通底するのは「表現」に対する熱量で、深読みすれば、「書く」ことで何者かであろうとする強い願望が文章の端々から感じ取れる。

たしかに、エッセイストという肩書にそう期待させる魅力があるのは事実だろう。

脳内のオリジナリティが形になつて世に発信されるだけでなく、それがコンテンツとして成立し、あわよくばいくらかの稼ぎにつながるなら、これほど楽しいことはない。もしも、自分の作品が名のあるメディアや編集者の目にとまり、たちまち売れっ子エッセイストの仲間入りとなれば、人生の大きな転機である。印税生活だって夢ではないのだ。いささか俗っぽいシミュレーションではあるが、こう考えればエッセイを書きたい人が後を絶たないのも当然だろう。

事実、巷のエッセイ講座の類いは盛況と聞く。では、エッセイ講座とはどのようなもので、何が行われているのか。その現場を探つてみたい。

そこで、誌面の連載陣から山本ふみこ氏に講師役を依頼し、エッセイ講座がスタートしたのが二〇一八年の秋だった。

「当時は都内のオフィスで講座を開催していましたが、遠方の読者のために、東京以外の地域でも開催したいと模索していた矢先に、新型コロナのパンデミックが発生したんです。そこでオンライン版の講座をスタートしたのが二〇二〇年六月のことです。結果的にはこれによつてより幅広い方に門戸を開くことになりました」

エッセイを書くことで どのような気づきが得られるか

今回話を聞いたのは、五〇代以上を対象とする女性誌『ハルメク』のオンラインメディア、